

環境意識に関する一考察Ⅵ
——女子短大生の環境意識分析を中心として——

A Study on Environmental Consciousness Ⅵ
—— Focusing on the Analysis of Environmental Consciousness
of Women's Junior College Students ——

荒井 義則

ARAI Yoshinori

環境意識に関する一考察Ⅵ

——女子短大生の環境意識分析を中心として——

A Study on Environmental Consciousness Ⅵ

—— Focusing on the Analysis of Environmental Consciousness
of Women's Junior College Students ——

荒井 義則

ARAI Yoshinori

要旨：地球環境の悪化は深刻な状況になりつつある。特に地球の温暖化は「温暖化の暴走」といわれるほど進展が速く、さまざまな悪影響を多方面に及ぼしている。「気候変動」ではなく「気候危機」という言葉も散見される。これらの環境悪化は人間の活動が主な原因であり、解決を困難にしている。解決のためには人間の意識の変化が重要である。そのためには、まず現状での環境意識を知ることが必要となる。本稿では女子短大生を対象に実施した環境に関するアンケートを分析し、現状での環境意識を解析する。また、本年（2020年度）と10年前（2010年度）の比較も試みる。

キーワード：環境問題、地球の温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨

1. はじめに

地球環境の悪化は日常生活に多大な悪影響を与え、人類全体の生存まで脅かしている。地球環境問題は国連・政府や一部の専門家だけでは解決は不可能で、一般の人々の生活様式の変革にかかっている。それゆえ、いろいろな環境意識に関する調査が実施されている。

本稿では、女子短大生の環境に関するアンケートを分析することにより、女子短大生の環境意識を解析する。現在の状態が続く限り、現短大生が社会の中心となって活動するところには、地球環境はさらなる悪化をたどり、日常生活への悪影響は甚大なものとなる。したがって、現短大生

の環境意識を調査することの重要性は少なくない。このアンケートは10年前から始めているので、今回は10年前（2010年度）と本年（2020年度）の比較を中心に解析を進める。

アンケートの実施日時と対象学生は本年度（2020年度）は

2020年11月18日 1限 基礎ゼミⅡ（会計・事務コンピュータコース1年） 14名

2020年11月18日 2限 基礎ゼミⅣ（会計・事務コンピュータコース2年） 14名

2010年度は

2010年4月17日 1限 暮らしの科学 受講生71名

である。提出は任意で、研究発表に用いることは事前に伝えてある。アンケートは無記名である。

2. アンケートの調査内容

以下にアンケートの設問内容を示す。

地球環境問題に関するアンケート

（1）地球環境問題に関心がありますか。

- ① 非常にある。
- ② ある程度はある。
- ③ あまりない。
- ④ まったくない。

（2）地球環境問題に対する以下の考え方のうち、あなたの考え方に近いのはどれですか。

- ① 地球環境問題は政府や自治体、あるいは国連が解決すべき問題であり、自ら取り組む必要はない。
- ② 科学技術がさらに進歩すれば解決できる問題であるから、自ら取り組む必要はない。

- ③ 地球環境問題は重要な問題であるから、自ら積極的に取り組む必要がある。
 - ④ まったく関心がない。
- (3) 地球環境の保全と経済発展に関する以下の考え方のうち、あなたの考え方に近いのはどれですか。
- ① 経済発展を多少犠牲にしても地球環境の保全に取り組むべきである。
 - ② 経済発展と地球環境の保全は両立できる。
 - ③ 地球環境の保全より経済発展を優先すべきである。
 - ④ 分からない。
- (4) 地球の温暖化について教えてください。
- ① まったく知らない。
 - ② 聞いたことはあるが、内容はよく分からない。
 - ③ ある程度は分かる。
 - ④ よく理解している。
- (5) オゾン層の破壊について教えてください。
- ① まったく知らない。
 - ② 聞いたことはあるが、内容はよく分からない。
 - ③ ある程度は分かる。
 - ④ よく理解している。
- (6) 酸性雨について教えてください。
- ① まったく知らない。
 - ② 聞いたことはあるが、内容はよく分からない。
 - ③ ある程度は分かる。
 - ④ よく理解している。
- (7) 砂漠化について教えてください。
- ① まったく知らない。

- ② 聞いたことはあるが、内容はよく分からない。
- ③ ある程度は分かる。
- ④ よく理解している。

(8) 京都議定書について教えてください。

- ① まったく知らない。
- ② 聞いたことはあるが、内容はよく分からない。
- ③ ある程度は分かる。
- ④ よく理解している。

(9) パリ協定について教えてください。

- ① まったく知らない。
- ② 聞いたことはあるが、内容はよく分からない。
- ③ ある程度は分かる。
- ④ よく理解している。

(10) 小学校や中学校で環境について学習したことはありますか。

- ① ある。
- ② ない。

(11) 高校で環境について学習したことはありますか。

- ① ある。
- ② ない。

(12) 学校以外で環境について学習したことはありますか。

- ① ある。
- ② ない。

(13) (12)で「ある。」と答えた人にお尋ねします。どこで環境について学習しましたか。

(14) 環境によい商品について答えてください。

- ① 少しぐらい高くても環境によい商品を購入する。
- ② 普通の商品と同じくらいの価格であれば、環境によい商品を優先的に購入する。
- ③ 商品を購入するときには、環境については考慮しない。

(15) 電気や水道について、すでに行っているものについては「１」、これから行いたいものには「２」、行うつものないものには「３」を（ ）内に記入してください。

- ① 不必要な照明はこまめに消す。（ ）
- ② テレビやラジオはつけっぱなしにしない。（ ）
- ③ 長時間使用しない家電製品のプラグはコンセントから抜いておく。（ ）
- ④ 冷蔵庫にものをつめすぎたり、頻繁にドアを開けたりしない。（ ）
- ⑤ 水やお湯はだしっぱなしにしない。（ ）
- ⑥ お風呂の水は有効に使う。（ ）

(16) ごみの削減について関心がありますか。

- ① 非常にある。
- ② ある程度はある。
- ③ あまりない。
- ④ まったくない。

(17) (16) で①、②を答えた人にお尋ねします。ごみの削減について行っていることあるいは今後行いたいことを以下に書いてください。

なお、（９）は2010年度のアンケートには設けなかった。他の質問は2010年度、2020年度共通とした。

3. アンケート結果

3.1 設問1～12、14、16の結果

以下の表に設問1～12、14、16の結果をまとめている。表中の数値は回答の割合を表す百分率であるが、小数第2位を四捨五入してあり、また、無回答もあるので合計が必ずしも100%になっていない場合がある。

表1 設問1～12、14、16の結果（2020年度）

設問	選択肢			
	①	②	③	④
1	0	60.7	35.7	3.6
2	10.7	0	78.6	10.7
3	35.7	32.1	0	32.1
4	3.6	32.1	53.6	10.7
5	10.7	46.4	32.1	7.1
6	7.1	46.4	32.1	7.1
7	7.1	42.9	35.7	7.1
8	42.9	46.4	3.6	0
9	14.3	67.9	10.7	3.6
10	96.4	3.6	—	—
11	85.7	14.3	—	—
12	17.9	82.1	—	—
14	0	67.9	28.6	—
16	0	57.1	39.3	3.6

表 2 設問 1～12、14、16の結果（2010年度）

設問	選択肢			
	①	②	③	④
1	22.5	64.8	11.3	1.4
2	8.5	4.2	84.5	2.8
3	33.8	42.3	1.4	22.5
4	0	21.1	70.4	8.5
5	1.4	38.0	56.3	4.2
6	0	32.4	63.4	4.2
7	1.4	38.0	52.1	8.5
8	14.1	50.7	29.6	5.6
9	—	—	—	—
10	93.0	7.0	—	—
11	71.8	28.2	—	—
12	14.1	85.9	—	—
14	7.0	74.6	15.5	—
16	15.5	56.3	25.4	1.4

3. 2 設問13の結果

（2020年度）

ニュース、テレビ、小学校のとき通っていた環境クラブ、気象が好きで気象の勉強をする過程で勉強した

（2010年度）

テレビ、映画、地域でのごみ削減の催し、市・地域での公演・勉強会、企業研究において企業と環境について調査

3. 3 設問15の結果

以下の表に設問15の結果をまとめてある。表中の数値は各問①～⑥における選択肢1、2、3が選択された割合を表す百分率であるが、小数第2位を四捨五入してあるので合計が必ずしも100%になっていない場合がある。

表3 設問15の結果（2020年度）

選択肢	番号		
	1	2	3
①	85.7	14.3	0
②	75.0	25.0	0
③	39.3	46.4	14.3
④	78.6	21.4	0
⑤	96.4	3.6	0
⑥	57.1	35.7	7.1

表4 設問15の結果（2010年度）

選択肢	番号		
	1	2	3
①	78.9	15.5	4.2
②	57.7	35.2	4.2
③	36.6	46.5	14.1
④	50.7	42.3	4.2
⑤	66.2	28.2	2.8
⑥	43.7	40.8	12.7

3.4 設問17の結果

（2020年度）

- ・ リサイクル（3人）
- ・ 再利用（3人）
- ・ 片面しか使わない紙は取っておいて後で使う。
- ・ 割りばしは使わない。

（2010年度）

- ・ ごみの削減・分別
- ・ リサイクル
- ・ 生ごみの肥料化
- ・ スーパーなどでビニール袋をもらわず、エコバッグを使用する。
- ・ 簡易包装
- ・ 詰め替え用の購入

- ・紙の裏を使用する。
- ・不要なものは買わない。
- ・物は長く使う。

この結果から、両年ともリサイクルや物は最後まで使うという「もったいない」精神が見て取れる。この点は評価できる。ただ、2010年度のほうがいろいろな対策が出ており、ごみの削減により積極的なことが分かる。特に、2010年度の段階で「スーパーなどでビニール袋をもらわず、エコバッグを使用する。」という対策が出ているのは特筆に値する。2020年度ではこの対策は出ていなかった。むしろ2020年度のほうが多く出てくると予想していたが、予想とは逆であった。

4. アンケート結果の考察

4.1 2020年度のアンケート結果の考察

(1) より「非常にある」、「ある程度ある」を合わせると60.7%であり、かなりの学生が地球環境問題に関心を寄せていることが分かるが、過去の調査と比べるとやや低くなっている。ただ、60%以上の学生が関心を寄せている理由の一つは、(10)～(11)の結果から分かるとおり、小学校・中学校・高校における環境教育の影響がある。小学校・中学校では96.4%、高校では85.7%が環境教育を受けており、大部分の学生が環境の学習の経験を有している。環境教育の重要性はこの例から考えても明らかである。これらの要因により学生の地球環境問題に寄せる関心が高くなっている。ただ(12)より、学校以外で環境教育を受けた学生がいることは分かるが、その割合は非常に低く、やや心配な点ではある。

(2) より「自ら取り組むべき」と考える学生が78.6%と多数を占めており、自らの問題と考えている学生が大部分を占める。このことは環境問題の解決に寄与する。一般の人々の環境に対する取り組みが環境問題の解決に大いに役立つからである。

環境問題の知識については、「まったく知らない」と回答した学生が「温暖化」3.6%、「オゾン層の破壊」10.7%、「酸性雨」7.1%、「砂漠化」7.1%となり、過去の調査に比べやや高くなっているのは問題である。また「よく理解している」と回答した学生が「温暖化」10.7%、「オゾン層の破壊」7.1%、「酸性雨」7.1%、「砂漠化」7.1%と「温暖化」を除いて10%を下回っている。環境問題に対する正確な知識は環境問題解決の第一歩である。短大・大学における環境

教育の果たす役割（正確な理解を与える）はますます重要さを増している。「京都議定書」については「まったく知らない」と回答した学生は49.2%であり、「パリ協定」については14.3%である。パリ協定は2020年から実行されるので、ニュースなどで取り上げられたこともあり、10%台であるが、京都議定書を知らない学生がこれほど多いのは問題である。短大・大学における環境教育の必要性を示す結果である。

(14) の回答を見ると、「環境によい商品」について「同じ価格なら購入する」が67.9%であるが、「考慮せず」28.6%がある反面、「高くても買う」0%であり、環境に対して積極的に支出するという面が見られないのは残念である。今後は「普通の商品と同じ価格の環境商品」の開発が重要になってくる。

(15) の電気・水道については、①、②、③、④、⑤、⑥すべてにおいて、1「実施している」と2「これから行いたい」を回答した学生の合計が80%を超えており、実生活でも環境に配慮した生活をしていることが分かる。意識や知識だけでなく実践を伴っている点は評価できる。

(16)、(17) のごみについては「非常にある」は0%であるが、「ある」が57.2%となり、環境問題同様関心の高さが伺える。(17) の回答例から考えると、実生活においてもごみの減量にむけてリサイクルや物を大事に使う「もったいない」精神が実践されており、この点は評価できる。

これらの結果を要約すると、地球環境問題について、意識や知識は過去の調査に比べるとやや低い面も見られるが、日常生活ではできる範囲で環境にやさしい生活を実践している学生が比較的多いことが分かる。

4.2 2020年度と2010年度の比較

(1) より「地球環境問題への関心」は2010年度は「非常にある」22.5%、「ある程度ある」が64.8%で合計で87.3%であるが、2020年度は「非常にある」0%、「ある程度ある」が60.7%であり、大幅に低下している。地球の温暖化の影響が現れ始めているにもかかわらず、2020年度のほうが低いというのは大問題である。(4) の地球の温暖化について、2020年度は「よく理解している」が10.7%、「ある程度分かる」が53.6%で合計が64.3%であるが、2010年度は「よく理解している」が8.5%、「ある程度分かる」が70.4%で合計が78.9%である。「よく理解している」の割合は2020年度のほうが高いが、合計では2010年度のほうが14.6%ほど高い。2010年度のほうが関心が高いのは、「知っている人の割合」が2010年度のほうが多いということが原因の一つになっていると思われる。オゾン層の破壊、酸性雨、砂漠化についても「よく理解している」

と「ある程度分かる」の合計はすべて2010年度のほうが高い。やはり知識のない学生の増加が関心のなさを生んでいる一因と考えられる。

一方、(15)において、「すでに行っている」と「これから行いたい」の合計は③以外では2020年度のほうが多く、実生活ではかなり環境にやさしい生活をしていることが分かる。しかし(16)のごみの削減への関心は2010年度のほうが高い。

以上より2020年度は地球環境問題やごみの削減への関心は2010年度に比べるとやや低く、地球環境問題の知識も2010年度に比べれば低くなっているが、実際の日常生活においては環境にやさしい生活をしていることが分かる。このような違いはあるものの、大きく変化したというわけではなく、ほぼ同じ傾向が続いていることが判明した。

5. 終わりに

温暖化をはじめとする地球環境問題は、実際に被害を与え始めているので、このようなアンケートも少しは意味を持っていると思われる。アンケート調査を始めてから10年たっているが、今後もこのような調査を続けていきたい。

参考文献

荒井義則「環境意識に対する一考察—女子短大生の環境意識分析を中心として—」『埼玉女子短期大学研究紀要第23号』2011.

環境省『環境にやさしいライフスタイル実態調査等』

https://www.env.go.jp/policy/kihon_keikaku/lifestyle.html, 2019.12.4.

環境省『環境にやさしい企業行動調査』<http://www.env.go.jp/policy/j-hiroba/kigyo/>, 2019.12.4.

保坂明德「環境意識と環境保全行動の選択要因に関する考察：高校生の環境意識分析を中心として」『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部外国語学部38』pp.67-85, 1999.

原田昌幸, 久野覚「地球温暖化および地球環境問題に対する一般住民の意識」『空気調和・衛生工学会論文集62』pp.71-79, 1996.

加藤弘二, 田中裕人, 児玉剛史, 玉澤友恵「環境保全活動に対する住民の参加意識の分析」『宇都宮大学農学部学術報告19(2)』pp.21-31, 2005.